東長靖『イスラームとスーフィズム――神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会　2013 年　vii+301 頁

著者東長靖氏は、長年、イスラーム神秘哲学思想の文献研究に携わり、多くの成果を挙げてきた。その一部は本書第Ⅱ部に収められている。また、第Ⅳ部でイブン・タイミーヤとワッハーブ派によるスーフィズム批判およびそれへの反論の紹介、および第Ⅲ部で多数の聖者列伝の人名リスト調査にも、長年、文献研究に携わってきた著者の力量と蓄積が示されている。諸文献に基づき、スーフィズム（タサウウフ）は中期スンナ派において伝統的なイスラーム諸学の一つに位置づけられていたこと、イスラームの聖者はスーフィーだけではないことが示されるなど、従来の通説を改める新しい知見がある。

加えて、本書の特徴は包括的なスーフィズム理解にある。スーフィズムには厳密な神秘主義・神秘哲学という側面と、種々の現世利益を求める聖者崇拝の側面があり、その関係をどう捉えるかが長年の論点の一つだった。本書はその両面を考察して統合的理解を試みた意欲作である。この統合的理解はイスラーム以外の諸宗教、とりわけ日本仏教研究にも重要な示唆を与える。またイスラームの地域的広がりに関して、インドやトルコはスーフィズムに関しては重要な地域だが、東長氏は中央アジア、アフリカ、インドネシア、中国各地のスーフィズムの実態のみならず、各地で行われてきたイスラーム研究にも言及している。概説書ではイスラームは世界宗教だと言いながらも、中東アラブの宗教という印象を与えがちだが、そうした面でもイスラームの空間的広がり、地域差に関心を示している。

まず、本書の内容を紹介しておきたい。

第Ⅰ部　スーフィズムへの視座
第 1 章　スーフィズム研究の歴史と潮流
第 2 章　スーフィズムの分析枠組
第 3 章　スーフィズムの歴史
第Ⅱ部　神秘主義としてのスーフィズム――存在一性論学派を中心に
第 4 章　イブン・アラビーと存在一性論学派
第 5 章　存在一性論学派の顕現節における「アッラー」の階位――カーシャーニーとジーリーを中心として
第 6 章　存在一性論学派における存在論と完全人間論――ジーリーを中心に
第 7 章　存在一性論学派の地域的展開と地域的偏差
第Ⅲ部　民間信仰としてのスーフィズム――聖者信仰をめぐって
第 8 章　イスラーム聖者の二系列――スーフィー聖者と非スーフィー聖者
第 9 章　イスラームの聖者論と聖者信仰――イスラーム学の伝統の中で
第Ⅳ部　イスラームのなかのスーフィズム――その位置づけをめぐって
第 10 章　マムルーク朝初期のタサウウフの位置づけ
第 11 章　マムルーク朝末期におけるタサウウフをめぐる論争――ビカーイーとスユーティー論争を中心に
第 12 章　スンナ派とスーフィズム――ワッハーブ派への反批判をめぐって
終章　「多神教」的イスラーム――スーフィー・聖者・タリーカをめぐって

第Ⅰ部第1章では、スーフィズムの先行研究を概観し、最近の新しい研究動向を簡潔に紹介する。F・ラフマーンが提唱したネオ・スーフィズムが引き起こした論争や、本書の包括的理解のきっかけとなったフランスでの研究動向を紹介し、東南アジアや中国ムスリムの研究もわずかだが紹介されている。第2章はスーフィズムという述語に付与された規範的意味を明らかにし、それを踏まえて分析枠組を説明する。スーフィズムという名称がヨーロッパ人研究者による命名であることは自明だが、東長氏は19世紀のオリエンタリストによるスーフィズム研究を概観し、彼らはスーフィズムを律法中心のイスラームとは異なるものとし、キリスト教にも通底する普遍的宗教として認識したと指摘する。イスラームとスーフィズムを無関係とする捉え方はオリエンタリズムが生み出したと東長氏は指摘する。現代では、サラフィー主義（原理主義）がスーフィズムをイスラームから切り離し、イスラームを高く評価し、スーフィズムを非難する。方向はまったく反対だが、スーフィズムとイスラームを無関係とみなす点では同じである。両者を分離する態度は、スーフィズム・タサウウフとイスラームという用語それぞれに「正しいスーフィズム」「正しいイスラーム」といった価値観が暗黙に付与されている。つまりスーフィズムは規範的用語として用いられることも多いと指摘する。その価値付与は外部のオリエンタリストのみではなく、イスラーム内部でも行われてきた。

規範的用語に惑わされず、スーフィズムを分析する枠組が必要で、東長はスーフィズムを神秘主義（X軸）、道徳（Y軸）と民間信仰（Z軸）からなる三極構造として捉える。時代によりスーフィズムがどの極を強調したかにより、その相違ないし多様性を説明する。神秘主義の萌芽期でもあった禁欲主義ではむしろY軸が強く、スーフィズム初期はX軸とY軸が強いが、12世紀後半以後、聖者崇拝などZ軸が顕著になる。近現代になると、ワッハーブ派のスーフィズム批判により、スーフィズムもY軸を強調するようになる。Y軸は「道徳」と命名されているが、シャリーア遵守の程度を示す指標で、シャリーア重視のイスラームとの遠近を測る指標である。

スーフィズムを神秘主義・タリーカ・聖者（信仰）複合現象と捉えつつ、東長氏はその三者は完全に重複するのではなく、それらの関係の精緻な検証はまだ行われていないと言う。適切に把握できない原因の一つは、神秘哲学と聖者の理論は形而上学的な思想研究の分野でおこなわれ、タリーカは歴史学で研究され、現代のタリーカや聖者信仰の実態は文化人類学で研究され、それらの研究者間の交流が少なかったことによる。このあたりの事情は、日本仏教の教義面と地蔵信仰などの現世利益重視の民衆仏教、死者儀礼を中心にした葬式仏教との関係と驚くほど似ている。その意味で、本書は、イスラームの専門書であるが、宗教学の分野の人々にも読むことを薦めたい。

スーフィズムの歴史は第3章でかなり詳しく紹介されている。まず修行論、霊魂論および聖者論の古典理論が完成し、ガザーリーが『宗教諸学の再興』でスーフィズムをスンナ派の究極に位置づけたことで、スーフィズムは「スンナ派的正統性」を獲得した。聖者列伝も著述されたが、それに関しては第8章に詳細な説明があり、60名のスーフィーがどの列伝に記載されているかを一覧表で示している。続いて「イスラームの核としてのスーフィズム（12世紀中葉から17世紀まで）」では、スーフィズムは民衆の間に根を下ろし、聖者信仰が盛んになり、タリーカも目立ち始めた。イブン・アラビーの神秘哲学もまた深化し洗練され、シーア派神学と哲学が混淆してイルファーン（叡智学）哲学に発展した。インドではスィルヒンディーが目撃一性論を唱え、またヒンドゥー教とイスラームの融合の動きも見られたが、そうした諸宗教の統一を求める傾向は存在一性論の底流でもあった。18世紀から現代までのスーフィズムの歴史も比較的詳しく紹介されている。20世紀になると、一部のモダニストがタリーカを前近代的として批判否定する動きがあり、トルコのよう

に近代国家がタリーカを弾圧したが、1970年代以後に、タリーカ・スーフィズムの復興も見られる。最近のスーフィズム・タリーカの広がりを支えているのはサイバー・スペースだという。

第Ⅱ部「神秘哲学としてのスーフィズム」では、イブン・アラビー哲学の概要（存在一性論と完全人間論）を説明し、存在一性論学派に属する弟子たちを数多く紹介する。神の顕現過程を五次元とするカーシャーニーとジーリーの六段階説を説明する。目撃一性論とは、神アッラーと被造物を同一と見なす存在一性論から、アッラーの至高性を重視したものとみなす変化であり、ジーリーの完全人間論では完全人間もアッラーの本質には至りえないとされている。イスラームでは、禅仏教で言う「逢仏殺仏」とは異なると東長は記している。最後に、存在一性論のインドや中国での展開に言及されており、一神教の伝統のないインドや東アジアでは、アッラーの至高性より高次に非人格的真理を置くことに抵抗がないと指摘する。

第Ⅲ部の民間信仰としてのスーフィズムでは、聖者信仰の諸相が説明される。従来はイスラームの聖者（ワリー＝神の友）はすべてスーフィーとされて論じられたが、実はそうではない。預言者ムハンマドの子孫はサイイド・シャリーフとして今日まで尊敬されており、初期イスラームの正統カリフや著名な学者も学問上、聖者として扱われた事例を挙げる。タリーカは聖者と関連づけられるが、スーフィーではない聖者もタリーカと結びつけられた。聖者論はまず聖者論に関する神学理論とシーア派のイマーム論が検証される。神学では預言者と奇蹟の関係が重視され、スーフィーの聖者の場合、奇蹟よりも直観智が重視されることが多い。聖者信仰の実践面ではとりなしと墓参詣の議論が紹介されているが、現代に限っても文化人類学の調査に基づく聖者信仰の実態の紹介があれば望ましい。

聖者信仰の説明の後に、第Ⅳ部でスーフィズムへの批判と反批判が紹介されている。東長氏は伝統的イスラーム学におけるタサウウフ批判を検証し、中期スンナ派ではファナーを核とするスーフィズムは伝統的な学問の一部に組み込まれていたことを明らかにする。イブン・タイミーヤもスーフィズムを全否定したのではない。だが、イブン・アラビー哲学はアッラーの人格の上位に非人格的真理をおく哲学であると断じ、奇行などのゆえにアフマディー教団を批判した。スーフィズム批判は「哲学、キリスト教、シーア派」という伝統的な異端のカテゴリーの名においてなされた。イブン・タイミーヤ以後も多数の学者がスーフィズム批判・擁護論争に加わったが、その中から15世紀末の否定派のビカーイーと彼への反批判で擁護派のスユーティーの議論の要点が示される。ビカーイーは、神と被造物を区別しない点と、諸宗教の一致の主張のゆえに存在一性論を多神教、異端とする。スユーティーの擁護論は、著作の真偽の不明さやイブン・アラビーの用語の比喩的解釈の必要性など消極的な擁護だが、要はイブン・アラビーがタサウウフを逸脱するか否かが問題で、しかも各論客のタサウウフ解釈が異なっていることを東長氏は指摘する。

第12章ではワッハーブ派への反批判が検証される。ワッハーブ派はスーフィズムを否定したのみならず、東長氏が「多神教的」と名づけたスンナ派をも批判した。ワッハーブ派への反批判は必ずしもスーフィズム側からではなく、「多神教的」スンナ派からもなされていた事例が示されている。終章は「『多神教』的イスラーム」という刺激的なタイトルである。現代ではサラフィー主義のシャリーア重視のイスラームが強調されがちだが、それ以前の中期スンナ派では聖者を認め、スーフィズムを伝統的学問教育の場でも教えられ、墓参詣などにも寛容だった。そのようなイスラームを東長氏は多神教的イスラームと表現し、他の宗教でも用いられる「C（カトリック）的イスラーム」という表現も使っている。東長氏は末尾で、地域差はあるが、現代でもスーフィズムは息づいており、草の根レベルのイスラームではモダニストよりスーフィー導師の啓発も無視できない

と述べる。再度、三極構造を用いて、今後のスーフィズムの多様な展開の可能性を示唆する。X軸は精神性を深めると同時に諸宗教に通底する普遍的方向へ発展する可能性を示し、Y軸でシャリーアを重視すれば、サラフィー主義のイスラームと通底する。さらに民衆の願望を満たすZ軸も根強いだろうと予測する。スーフィズムにはいくつかの可能性をもつと締め括っている。

最後に、本書で疑問に残った問題について触れておきたい。それは哲学およびギリシャの諸学問をイスラームにおいてどう位置付けているのか、明確でないことである。東長氏はイスラームの学問伝統に言及した際、近現代は「初めてイスラーム学以外の知の体系の持ち主が登場したという意味で、きわめて特異な時代」と記す。だが、アッバース朝初期の古代ギリシャの哲学と自然学の翻訳と受容は、すでにイスラームが一神教と無関係な知の体系を導入したことを意味する。イスラーム神学の成立にもギリシャ哲学は大きな影響を与え、イブン・アラビー哲学にも新プラトン主義の流出論が援用されている。中期スンナ派はスーフィズムを容認したが、哲学およびそれと同類とみなした存在一性論を否定したと東長氏は述べるが、氏はイブン・アラビーを哲学ではなくタサウウフだと認めている。実際に、イブン・アラビーはその難解な著作を理解していないであろう民衆や為政者から聖者として尊敬を集め、墓参詣の対象となっている。この点で、明らかにスーフィズムに属する人物である。啓示と理性の対立はヨーロッパでもユダヤ思想でも問題になり、当然イスラームでも両者の関係は重要なのだが、本書ではこの点が奇妙にすり抜けられているようで、より精緻な考察を望みたい。

第二に、スーフィズムを「神秘主義・タリーカ・聖者信仰複合現象」と規定するが、本書ではタリーカの解明がやや物足らない。スーフィズムの三極構造（神秘主義、聖者信仰、道徳）は既述したようにその歴史的変化をうまく説明できる枠組だが、その三極にタリーカが含まれていないことに多少の違和感が残る。タリーカは歴史学で研究されてきたと指摘するが、それらを参照した箇所がほとんどなく、おそらく氏が扱ってきた原典にもタリーカの定義に相当する適切な説明がないのではと推測される。教会制度を創設しなかったイスラームにおいてタリーカがどのような制度でどのように機能したのか、他宗教でいえばどのような制度に相当するのかなど、宗教学の立場からは知りたい問題である。

宗教学の立場からは、本書は興味深い事例に満ちている。仏教民俗に詳しかった五来重がヨーロッパを旅した折に、教義ではなく現世利益の民間信仰にこそ宗教の普遍性が見られると言ったが、本書で説明されたイスラームの聖者信仰のもつ宗教性の解明にはイスラーム以外の諸宗教との比較の視点を取り入れると有効なのではないかと思われる。

（小田　淑子　関西大学文学部教授）

中西竜也『中華と対話するイスラーム――17–19世紀中国ムスリムの思想的営為』（プリミエ・コレクション37）京都大学学術出版会　2013年　xxvi＋426頁

中西竜也氏の『中華と対話するイスラーム』を読み、さまざまのことを思った。以下に記すことはこの本についての私的な所感である。1945年に日本軍国主義が連合国軍に敗北するまで、日本では中国イスラームについての研究が盛んに行われていた。それは日本の軍国主義者たちが共産主義勢力の伸長をふせぎながら中国大陸の中に自らの勢力圏を確立するために、いわゆる「回教徒」